

常照

第805号

本願寺小樽別院

二月の常例布教（こ法話）のご案内

○前期 二月七日（日）～十一日（木）

休 座

○後期 二月十三日（土）～十六日（火）

北海道教区 後志組 富貴寺
講師 安野義一 師

○場 所 小樽別院内

○時 間 午後二時（法要終了後）～午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。
どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院ください。
席の間隔を保ち、換気実施の上、お待ちしております。

座布団から伝わる

冬の寒さは、人とのコミュニケーションが増える場面だと思っております。ゴミ出しにいけばそこをキレイに雪かきしてくれているおじさんがいます。家の前の雪かきをしていけば、「今日は降つたね」と不満をこぼし、頑張りましようと励ましあうご近所さんがいます。

冬場のご自宅への月忌参りは辛い。というのはまあ本音ではあります。しかし一方で冬場のお参りの時ほど人の優しさやお気遣いが身にしみる時期もないのです。これは全ての僧侶が感じていえることでしょう。車でご自宅にお伺いしますと、家の前の雪を寄せて駐車位置を空けてくださっていたり、ご近所のかたが「ウチの前に車を置いていきな」と親しく声をかけてくださっ

たり。

その中でも私が一番嬉しいのは寒空の中、ご自宅にお参りに伺う時であります。玄関先で雪をほろつてインターホンを鳴らすと、「寒かったでしょう」と、迎えて下さるお宅があります。そしてストーブの前で温めていた座布団を仏壇の前に敷いてくださるのであります。「ウチの仏間は寒くてね、ゴメンなさいね」と仰る姿に恐縮し、座るのであります。するとまあ、思わず「うゝ温かい。ありがとうございます」とこんな感謝の思いと言葉がでてくるのです。こういうのを幸せと呼ぶのでしょうか。同時に、「こんな事をしていただけなのはお坊さんだけだ。袈裟・衣に感謝せねば」と自覚させられる場面でもあります。

ところで、座つて「うゝ温かい。ありがとうございます」という言葉は、言わなきゃいけないと頭で考えて口か

らでてくるお世辞でしょうか？実はこの一枚の座布団が、お念仏の何たるかを私に伝えてくれていたのです。

何回称える？

浄土真宗では、聴聞が大事、そしてお念仏を申すことも大事なんです。阿彌陀さまのお慈悲の心が南無阿彌陀仏の六字と仕上がって私達の元に届けられたのですよ。と、こういう話をします。そうしますと「そしたら何回ぐらい称えたらいいんでしょうか？」と質問を受けることがあります。なるほど、お尋ねになる気持ちもよくわかります。これが処方された薬なら【用法・用量をしっかりと守って服用してください】とまあこうなるでしょう。しかし、薬であれば、飲み忘れもあります。お念

仏を称えることを忘れる日もきつとあるでしょう。称え忘れたならばお浄土に生まれることができなくなるのでしょうか？

いえ、そうではありませんね。お念仏はお浄土へ参らせてもらうための条件ではありません。お浄土参りが確定していることの証拠であり、御礼であります。

座布団の話に戻します。家の人の「寒かろうな」という優しさが、座布団を温め、座布団を通して温かさと優しさが届けられ、座布団の温かさが私を「ありがとうございます」と言う人間に変えてくれたのです。私はもともと御礼を言うような人間ではありません。それを変えてくれたものがあるのです。何だか大層な話ですが、そういう理屈です。

乃至十念（ないしじゅうねん）

ちなみに阿弥陀仏の願いと誓いが説かれた仏説無量寿経の中には、念仏を称えることを乃至十念と誓われています。これは十回称えたらよいという意味ではなく、数は定めません。ということでもあります。多いも少ないもないのです。もつと言えば称えたものしか救わない仏さまではありません。しかし、「別に念仏は称えなくても大丈夫なんですよ？」というのは横着です。甘えです。ありがたいと思えたら、何回御礼を申してもよいのです。最初は合掌して念仏申す、まねごとから。形からで結構。そのうち、そのうち気張らずにお念仏がでてきてくださいます。私たちが歩む仏道は御礼を申す仏道なのですから。



聞法とは私

法を聞く

ことではなく

私を法に

聞くことである